

1969年度平城宮跡・藤原宮跡発掘調査

1969年度平城宮跡発掘調査部の調査 1

調査部は、1969年度に第35・54～57・60・61次にわたる平城宮跡の発掘調査を実施した。このうち第35次調査は、第2次大極殿東外郭についておこなったものである。

平城宮跡の規模は、ながらく約1km四方と考えられてきた。しかし、1967年に、宮域が東方にさらに250m張り出すことが判明した。この結果、建設省が当初、推定東一坊大路に建設を計画した国道24号線バイパス路線は、あらたにウワナベ古墳・市立一条高校の東側の、推定東三坊大路を通る位置に変更されることになった。第54次以降の調査はこの路線敷地について実施したものである。

藤原宮跡の発掘は、1966年以来、奈良県教育委員会が国庫補助事業として実施してきたが、本年度から本研究所がこれをうけつぐことになり、第1次調査として門跡を発掘した。

各次別の調査面積・期間、遺構の規模・時期については、第1～3表を参照されたい。

調査 次数	調査地区		調査期間	調査面積
平 城 宮 跡	35	6AAE N・K } 第2次大極殿東外郭	1968.12.20～1969. 4.30	35a
		6AAF S }		
	54	4PUN O・P ウワナベ古墳後円部東方外堤	1969. 2.13～1969. 4. 3	4
	60	4PUN N ウワナベ古墳前方部東南方外堤	1969.10.22～1970. 1.13	10
	55	6AFB I・J } 平塚1号墳・平塚2号墳	1969. 3.24～1969. 5.16	20
藤 原 宮 跡	56	6AFB F・H } 左京一条三坊十五・十六坪	1969. 6. 2～1969.10.27	32
	57	6AFB A～E 東三坊大路(一条通以北)	1969. 7. 9～1969.12.17	24.6
	61	6AFE H・J・K 東三坊大路(一条通以南)	1969.11.14～1969.12.14	1.5
藤 原 宮 跡	1	6AJH J～L 南門か	1969.12.22～1970. 5.25	16.2

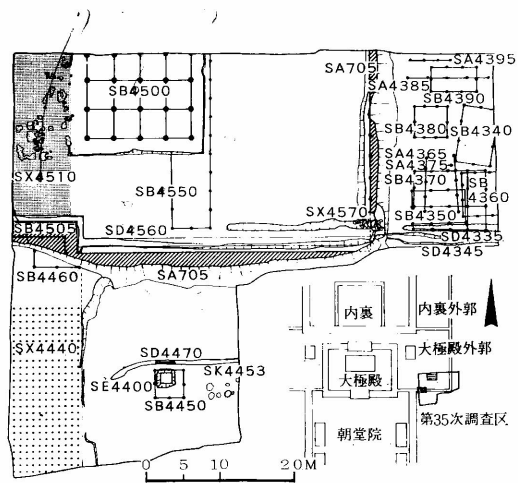
第1表 1969年度発掘調査状況

B期に入ると、A期の整地層のうえに、さらに厚く整地して、外側より1.5m高くし、縁辺に築垣をめぐるし、大極殿外郭を整備している。

築垣は南面部分（南面築垣）と東面部分（東面築垣）とから成っており、鉤の手状に大極殿の東外郭を画している。南面築垣は全長91m（300尺）あって、その西端で大極殿回廊の東南隅（第1次調査検出）に接続し、また、東面築垣は全長98.4m（330尺）あり、北端で内裏東外郭の築垣（第33次調査検出）に接続する。今回の調査部分では、築垣外方が削平されていたため、築垣の幅を確認できなかったが、従来（第26・33次）によって南面・東面の築垣の幅がそれぞれ1.5m、2.7mであることがわかっている。なお、南面築垣の内側には雨落溝がある。この溝は東面築垣下の石組暗渠を通してさらに東の溝につづいている。

南面築垣のはほぼ中央、今回の調査地区の西端で、築垣にとりつく門の基壇を検出した。桁行3間・梁行2間、基壇は東西13m・南北10m、と推定される。築垣北側の雨落溝は、門の部分だけ基壇にそって北に突出している。門から北と南には道がのびており、北の道は凝灰岩の切り石を敷きつめている。

築垣の内方、門の東北には、礎石建物があり、すべての柱通りに根石を検出した。この建



	建 物		柱間数	柱間寸法 桁行 梁行
A 期	S B 4340 S B 4460 S B 4550	南 北 棟 南 北 棟 南 北 棟	3×2以上 2以上×1以上 2×9以上	^m 2.4×2.4 3.0×2.4 2.4×2.7
築 垣 内 B 期	S A 705	築 地		寄柱 3.0
	S B 4500	礎石建物	3以上×4	3.9×3.3
	S B 4505	門	2以上×	3.0×
B 期 B 期	S B 4450	井戸覆屋	2×2	1.8×1.8
築 1 期	S B 4350 S A 4385	東 西 棟 東 西 柵	3×2 4	2.4×2.4 2.4
B 2 期	S B 4370 S B 4380 S B 4390	東 西 棟 東 西 棟 東 西 棟	4×3 3×2 3×2	2.4×2.4 1.5×1.8 2.1×1.5
外 B 3 期	S B 4360 S A 4365 S A 4375 S A 4395	東 西 棟 南 北 柵 南 北 柵 南 北 柵	2以上×3 4 4 3	1.8×2.1 1.5 1.5 1.8

第2表 大極殿東外郭の主要建物

物は発掘地外の北方につづいており、全体の規模はわからないが、基壇の東西幅は18mある。周囲には基壇化粧に使用した凝灰岩が散乱していた。この建物は、その位置と規模から、楼ふうの建物と推定できる。なお現在この建物の西北方にのこっている土壇は、東楼とよばれている。この両者を楼とみとめれば、大極殿東外郭築垣の中に2つの楼が建っていたことになる。なお、東面築垣の内側に沿う長さ8m、幅5mの範囲に1,700点以上の完形の軒平瓦・平瓦をたて並べた状態で検出した(口絵2)。建物撤去の際に放棄したものであろうか。

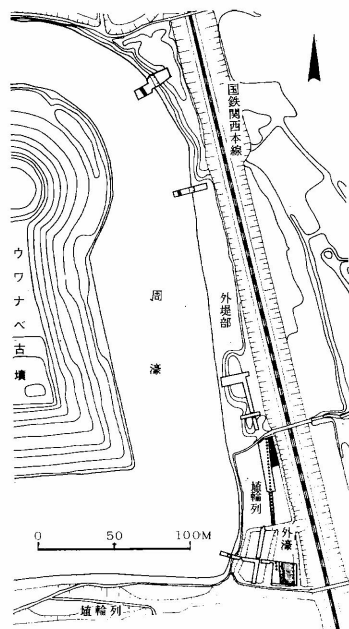
東面築垣の外では掘立柱建物6・柵4を検出した。これらは、表示したように、さらにB₁~B₃期の3段階に区分ができる。南面築垣の外、道路の東側は、道路面より0.5m低くなっている。ここで覆屋をもつ井戸(方1.5m、深さ1.5m)を検出した。井籠組の木杵が3段のこっており、また、内部から櫛と和同開珎・隆平永宝が出土した。井戸の北には、玉石を用いた溝があり、その一部に木樋を用いている。井戸の東側には、小土壇群がある。この1つから陰陽寮に關係する木簡が出土した(42頁参照)。今回の調査範囲では、井戸・小型建物を検出したにすぎず、この1画をただちに陰陽寮とむすびつけることは速断にすぎるかもしれない。しかし、平安宮大内裏園で今回の発掘地区に相当する朝堂院東側に陰陽寮が位置していることは、今後、大極殿東外郭外方の地域の遺構を考える上で興味ある事実といえよう。

ウワナベ古墳東外堤部(第2図) ウワナベ古墳の周濠と外堤部の調査は、同古墳後門部東方(第54次調査)と、前方部東南方(第60次調査)とにわけて実施した。

後門部東方においては、周濠から外堤にわたるトレンチを南北2カ所にもうけた。この結果、築造当初の周濠外岸は2段構成で、ゆるやかな傾斜面をなしていたことがわかった。岸の上端は、南トレンチにおいては現在のそれとほぼ同位置に、北トレンチでは4m東で検出した。岸の基底部は、いずれのトレンチにおいても、現在の岸の下端から10m西寄り、今の濠底から4m下で検出した。基底部には拳大の礫をもちいた葺石が2mの幅でのこっていた。

濠内の埋土上層(厚さ2m)は周濠を灌漑池に利用した結果、滞水状態で腐植土がたまつたものとみられる。そして出土遺物からみて平安時代末以後の堆積であることが明らかになった。なお、外岸の位置を確認するためのトレンチを、周濠東岸の南端近くにも設置した。この結果、現在の岸から2m西に寄った位置で、もとの岸の上端を検出し、また岸が2段構成であったことをここにおいても確認できた。

前方部東南方においては、円筒埴輪列と外濠とを検出した。円筒埴輪列は周濠外岸基底線の東25mに、それと



第2図 ウワナベ古墳東外堤の遺構

平行して直線に南北につらなっており、溝（幅0.7m、深さ0.15m）を作って約15cm間隔で円筒埴輪をならべている。円筒埴輪は、南北96mの調査範囲内（うち25mは未掘）で約120個出土した。外濠（幅10m、深さ0.5m）は埴輪列の東2mにあり、外堤にそって一周するものとみられる。滞水の痕跡はなく、空濠であったと考えられる。中から埴輪片が出土した。

ウワナベ古墳東外堤部で出土した遺物には、埴輪・土師器・須恵器が多量にみられる。埴輪にはキヌガサの破片もある。円筒埴輪は鱗つきで径30～40cm、凸帯は4条あるとみられ、復原高は約70～80cmとなる。なお円筒埴輪には舟の画をえがいたものがある。

ウワナベ古墳は、現在、長さ254m、周濠をふくめると全長400mにたつすが、今回の調査結果と、周辺で発見した埴輪列、および航空写真・地形図・地籍図とにもとづいて復原すると、全長約280m、前方部幅約160m、後円部径約150mとなり、水面は低く、くびれ部西側にある造り出しは、常時水面上にあらわれた状態にあったとみられる。周濠の外には外堤（幅30m）がめぐり、その内・外両縁には、円筒埴輪をたてならべている。外堤の外には、さらに外濠をめぐらしている。この外濠は、今回の調査部分では幅10mであったが、古墳の西方と前方部の南方においては、25m内外らしい。このようにして、ウワナベ古墳の外濠をふくむ全長は、じつに480mに達することになる。この新事実、ウワナベ古墳のみではなく佐紀盾列古墳群の研究にも新たな問題を提起するものといえよう。

なお、ウワナベ古墳前方部東方の調査では、2カ所の埴丘状の盛土をも調査し、これとともに、国鉄関西線工事にともなう排土の堆積であることも確認した。また、外濠の東方では、奈良時代末期の南北溝（幅2m、深さ0.6m）を検出している。

平塚1・2号墳（第2図・口絵2） 右京一条三坊十五・十六坪に相当する地域の調査で、奈良時代の遺構下に、前方後円墳2基を検出した。両古墳とも西向きで、濠を接して南北に隣りあっている。小字名をとって、北の古墳を平塚1号墳、南の古墳を平塚2号墳と仮称している。

両古墳は、ふるくは奈良時代の整地建設工事、ちかくは国鉄関西線の敷設工事によって、主体部はもとより後円部の大部分を失っている。しかし、現存する部分では、埴丘基底部の斜面・葺石はよく原状をとどめている。

平塚1号墳は、全長約70m、前方部長18m、前方部幅30m、後円部径約50mの帆立貝型前方後円墳である。このうち前方部の大部分と後円部の一部、および、これをめぐる周濠を検出した（口絵2）。葺石は基底の裾にやや大型の礫を一行に並べ、埴丘斜面を拳大の小礫で覆うものである。北側くびれ部には、後円部をめぐる円筒埴輪列の一部をみいだした。平塚1号墳の出土遺物には、濠内から出土した円筒埴輪、水鳥・短甲・盾などの形象埴輪がある。

平塚2号墳は、全長約70m、前方部幅43mの前方後円墳である。⁽²⁾本古墳は平塚1号墳と同じ西向きであるが、主軸の方向はやゝ異り、西について僅か南に偏している。前方部の前半部分20mの範囲と、これをめぐる周濠を検出した。前方部前端での濠幅は7mあり、この部分で、北濠の北岸と南濠の南岸との距離は60mある。濠は、地山を1.5m掘りこんでいる。葺

石に小礫を用いている点は1号墳と同様である。ただし、南辺部分では削平が著しく葺石をとどめていない。周濠埋土から円筒埴輪、水鳥・短甲・盾などの形象埴輪が出土した。

平塚1・2号墳は、いずれも西向きであって、葺石はともに小礫を用い、裾に大型の礫を用いる点が共通している。また両古墳の円筒埴輪・水鳥埴輪は酷似している。これらから、両古墳の築造年代には大きなへだたりはないと考え、ほぼ5世紀前半におきたいと思う。なお両古墳が周濠を接していること、主軸の方向がちがうことから同時の築造でないとも考えられる。しかし、両者の先後関係はわからない。

また、平塚1号墳が、ウワナベ古墳外堤東南隅から南へ45mの位置にあるところから、両古墳がウワナベ古墳の陪塚である可能性もある。また、陪塚でない場合にはウワナベ古墳との先後関係も問題となってくる。しかし、いま、これらについて積極的に論ずる材料はない。

なお、平塚1号墳の墳丘下には、北東から南西に流れる溝（幅2m、深さ1m、断面V字形）があり、平塚2号墳の前方部の墳丘下には、溝か土壙かと思われる落込みがある。これらの溝は古墳に先立つ遺構であるが、時期については不明である。

左京一条三坊十五・十六坪（第3・4図、第3表） 本調査地域は東三坊大路の西側に沿って、南は条間大路に、北は北京極大路近くまでおよぶ、延長250m、幅30mの範囲である。調査地域の全域にわたって奈良・平安時代にぞくする遺構を検出した。おもな遺構は、掘立柱建物27・柵4・井戸5・溝8・庭園1などである。ただし、条間大路は確認できなかった。

奈良時代の遺構はA—E期にわけられ、またE期の遺構は、さらにE₁—E₃期に細別できる。

A期には平塚1・2号墳を削平し周濠を埋めたとて整地し、建物2棟を建てている。2号墳の濠の西北隅には井戸（方0.9m、深さ3.7m）を作っている。縦板組みで周囲に石敷（方4m）がある。

B期には溝（幅1.5m、深さ0.5m）と井戸（方1.2m）とを作っている。溝は、1号墳南濠の埋立地にあり、西から東に流れ、東南に流れを変えたのち、さらに転じて南流している。井戸は溝の北側にあり、底に礫を敷いている。枿はのこしていない。

C期にはB期の溝の東流部分を南につけかえたのち、建物を建てている。溝（幅3m、深さ0.5m）は、南部分で2つにわかれて、ふたたび合し、2号墳北濠あとの低地に注いでいる。溝には小枝をからめて、しがらみを組み、岸には部分的に杭を打ちこんでいる。この溝から多量の土器と木器・木簡が出土した。木簡には「楽毅論 夏」・「靈龜三年六月」と記したものがある。墨書土器には「□由加和銅□」と器名と年次を記したもの、「尼家」と書いたものがある。なお、調査地域北端にある溝もこの時期にぞくしている。

D期はこの地域が最も整備された時期である。すなわちC期の溝を埋め、2号墳の周濠の低地を再度整地して建物3棟をたて、庭園を作っている。建物のうち2棟は東側妻通りをそろえている。その東南にある建物は規模のわりに太い柱を使用しており、倉庫かもしれない。

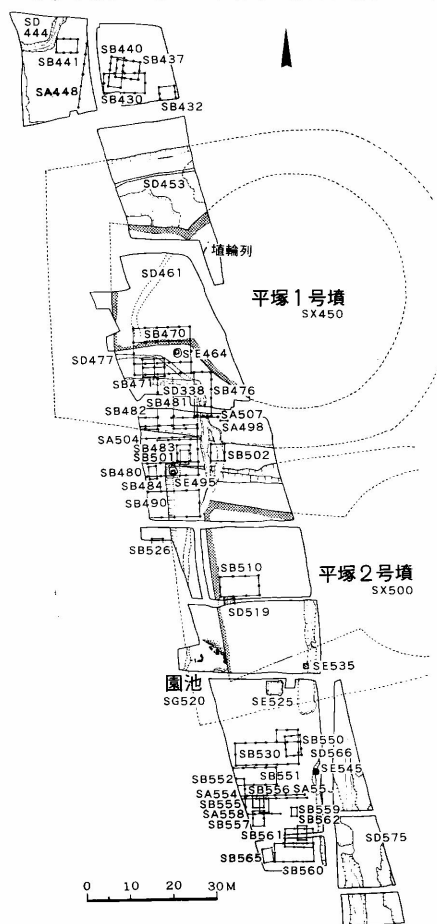
庭園は、2号墳前方部の前面南部にあり、濠の低地・古墳基底部の斜面・葺石を利用して

作っている。本来の葺石に、転落した葺石を加えて、東西に長い楕円形の浅い池(6m×4m)とし、その岸にそって石英質片麻岩・花崗岩・安山岩(三笠山安山岩)などの粗面の自然石6個(最大のもの0.9m×0.4m,高さ0.6m,最小のもの0.6m×0.3m,高さ0.4m)を配している。

E期は、建物群が発掘区北端と南端とに集中的に作られた時期である。E₁期(建物1・柵1・井戸1), E₂期(建物4・柵1), E₃期(建物6)の3小期が認められる。E₁期の井戸は、底に小礫・木炭を敷きつめ、曲物(径0.7m)を重ねて枠とした丸井戸である。

平安時代に入ると、両古墳の周濠を埋めたた奈良時代の整地層の上に、さらに厚く盛土して(0.4m)、建物4・柵1を作っている。他に、2号墳南濠からやや離れて建物1がある。これらの建物の廃絶後に作った東西方向の小溝から、灰釉・緑釉陶器片が多数出土した。

以上にあげた遺構のほか、時代を決定できない建物8・柵1・井戸2・溝3がある。このうち3条の溝は、東三坊大路上にあることから、道路廃絶後にできたものである。井戸はともに2号墳南濠のあとにある。東方のものは縦板組み(方1.2m)で底に小礫を敷きつめている。西方のものは周囲に敷石(方3.5m)を配した浅い泉のような遺構である。



第3図 平塚古墳と左京一条三坊の遺構

建	物	柱間数	柱間寸法 桁行 梁行	備 考
A 期	SB471東西棟	2×2	2.4×2.1	
	SB481南北棟か	2×1以上	2.7×3.0	
	SB482東西棟か	1以上×4	2.7×3.0	
C 期	SB470東西棟	5×4	2.7×2.7	南北廂, 北廂のみ梁行3.3
D 期	SB480東西棟	4以上×4	3.0×3.0	南北廂
	SB490東西棟	4以上×2	3.0×3.0	
	SB510東西棟	3×2	3.0×3.0	倉庫か
E ₁ 期	SB551東西棟	4以上×1	2.7×4.8	妻柱なし
	SA554東西柵	6以上	2.4	
E ₂ 期	SB530東西棟	5×2	2.4×2.4	北2間分に廂
	SB555南北棟	1×1	2.4×3.0	
	SB561東西棟	3×3	2.4×1.5	
	SB565南北棟	1×1	2.4×3.0	
	SA558東西柵	4以上	2.1	
E ₃ 期	SB552	1以上×3	2.4×2.4	
	SB556南北棟	1×1	2.7×3.0	
	SB557南北棟	1×2	2.4×1.5	
	SB559南北棟	1×1	2.4×1.2	
	SB560東西棟	6×2	1.8×2.1	間仕切りあり
平安 時代	SB562南北棟	1×1	2.1×3.0	
	SB476南北棟	5×2	2.1×2.1	
	SB501南北棟	2×1	2.1×3.0	
	SB502南北棟	2×1	2.1×2.7	
	SB550南北棟	3×2	1.5×1.5	
時代不明	SA504東西柵	4	2.7	
	SB430東西棟	4×2	2.5×2.5	
	SB432南北棟	2以上×1	1.5×3.6	
	SB437東西棟	3×2	1.5×1.5	
	SB440南北棟	4×1	2.4×3.0	
	SB441東西棟	3×2	1.5×1.5	
	SB483南北棟	1×1	1.8×3.0	
	SB484南北棟	1×1	1.8×3.3	
	SB526南北棟	1×1以上	2.1×	
	SA448南北柵	6以上	2.4	

第3表 左京一条三坊検出の主要建物

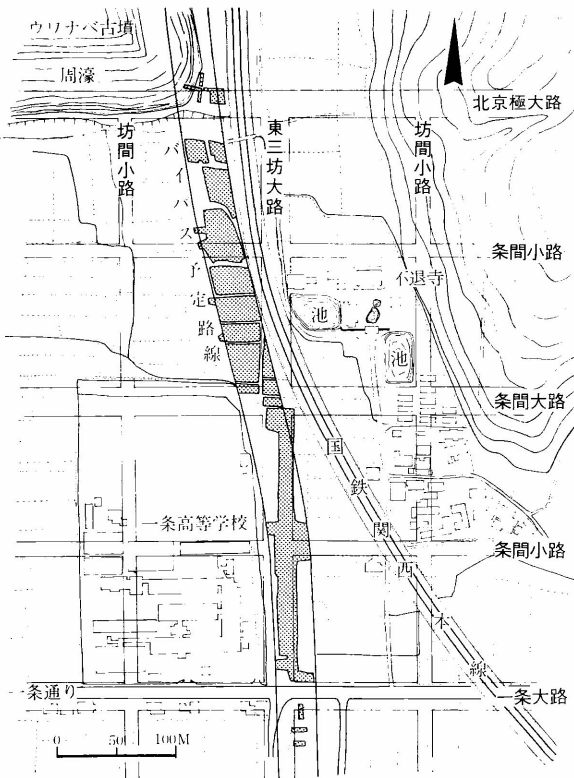
東三坊大路(第4図,口絵1) 通称一条通り以北の,南北全長 240mにわたる地域で,東三坊大路とその東側溝・築地1・柵2を検出した。一条通りの南においては,トレンチをもうけて,推定一条大路北端から南100m, および200mの地点で,東三坊大路東側溝を検出した。しかし,一条大路南側溝は,後世の氾濫でこわされたらしく,みいだすことができなかった。

東三坊大路は,従来,幅24m(8丈)と推定している。今回の調査では,その東部の19m分を検出したが,西端は,みいだすことができず,遺跡の上で道幅を確認することはできなかった。大路の東側溝は,調査地域の北端においては断面V字形(幅2m),中ほどでは断面U字形(幅4～

5m)を呈し,南端付近では,大きくひろがって氾濫の様相をしめしていた。一条大路と条間大路との間の条間小路が存在したと推定される位置付近(一条通り北約100m)で,側溝東方の状況を調査した。側溝の東に接して,南北方向の築地とそれとともなる雨落溝とがある。さらにその東には,柵が2条ある。このうち,南北ともに調査地域外に連続している,東側の柵には,柱のない間隔(約9m)があり,この部分を条間小路の位置と推定できる。

本調査地域の遺物には,土器・瓦・埴・土馬などの土製品をはじめ,金属製品・石製品・木製品,および木簡(43頁参照)があり,その大半は,東三坊大路の東側溝で出土した。奈良時代の遺物がわずかで,平安時代(9世紀後半～10世紀前半)にぞくする遺物が大多数を占めるのは,平安時代初期に溝さらいをおこなった結果であろう。

この溝の遺物の年代をさめる手がかりとなるのは銅銭と木簡である。溝の堆積土は3層に区別されるが,このうち下層で検出した銅銭は404枚あり,和同開珎から皇朝十二銭の9番目にあたる貞観永宝(870年鑄造)までの全種類がそろっている。しかし,10番目の寛平大宝(890年鑄造)およびそれ以降の銭は皆無である。中層出土の138枚の銅銭には,和同開珎はなく,寛平大宝109枚と延喜通宝(907年鑄造)1枚とをふくんでいた。下層から出土した木簡に,天長5年(828)銘をもつものがある事実からも,下層は9世紀末までに堆積したものとすることができる。



第4図 東三坊大路調査地域付近地形図

須恵器・土師器・黒色土器などの土器のほか、多数の施釉陶器や越州青磁（第5図10・11）がある。緑釉陶には椀（16・18）・稜椀（17）・皿（14・15）・耳皿（13）三足盤（12）・葉壺・唾壺（19）・把手付瓶など約200個体分ある。なお輪花や花文・秋草文の陰刻（17・18・19）をもつものもみられる（口絵4）。灰釉陶は300個体近くあり、椀（第5図4）・双耳椀（3）・皿（2）・段皿（1）・耳皿・香炉（5）・把手付瓶（6）・平瓶（7）・双耳壺（8・9）など各種の瓶・壺がある。黒色土器には、椀・皿・杯・甕のほか、珍しいものとして硯がある。灰釉皿の裏面には、「新殿」「大西」「酒井」「川力」などの墨書をもつものがあり、土師器の椀には底に「隅寺」（海龍王寺の別称）と書いたものがある。

これらの豊富な土器・陶器は、平安時代の土器・陶器研究に多くの問題をなげかけている。たとえば、今回出土した灰釉陶は胎土・技法・釉・器形・器種などが愛知県猿投古窯出土の土器と類似している。しかし、東側溝下層出土の土器は、前述のように9世紀代にさかのぼると考えられるのにたいして、猿投窯における灰釉陶は10世紀中葉以降、11世紀代にかかるものと考えられているのでここに1・2世紀の年代差を生じることになる。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

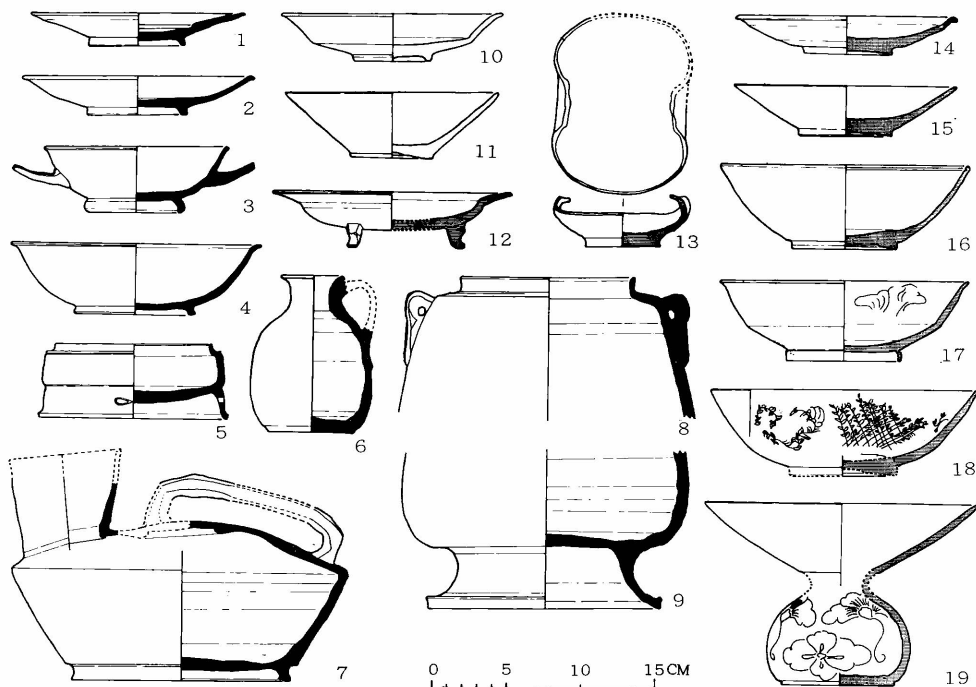
瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦などがある。このうち、重圏文軒丸瓦には「右」の逆字をもち、難波宮跡や長岡宮跡出土と同範のものがある。金属製品には銅銭・帶金具・刀装金具・鉾・釘・座金具・金銅飾板・針金などがある。銅銭についてはすでにのべたが、皇朝十二銭のうち最後の鑄造である乾元大宝（958年）を除く総ての種類があり、総計736枚に達している。

木製品には、下駄・曲物・折敷・盆・櫛・斎巾・しゃもじ・さじ・はし・ざる・紡錘車・糸巻・きぬた・木釘・桧扇・かんざしなどの日常生活什器が顕著である。このほか人形・剣形・刀子形木器などもある。また特殊なものとしては、飛ぶ鳥を墨で描いた板や赤彩した火焰宝珠形の板などがある。漆器には椀・皿・盆・高杯などがある。多くは黒漆であるが、内面に赤漆をかけたものもあり注目される。

石製品には、石帯・丸玉・砥石などの他に弥生時代の柱状片刃石斧も出土している。なお、一条通りの南方のトレンチでは若干の土器片・瓦片を検出したのみである。

藤原宮の南限（口絵4） 藤原宮の四至のうち、北限・西限・東北隅は、奈良県教育委員会の調査で明らかとなっている。今回の調査は、宮城南限の確認を主目的として実施し、これまで朝堂院の南門と推定されていた門跡から南へ、トレンチ（長さ150m、幅10m）を設けた。

この門跡の遺構は、日本古文化研究所によって1943年に検出されている。調査は、まずこの一部を再検出することから始めた。遺構は、礎石すえつけのための掘りかたの最下部と、根固めのための玉石とがわずかに残存する程度であって、基壇施設のほとんどは失われ、また特別の基壇地業の痕跡は認められなかった。調査地域が制限されていたため、門の完全な規模は確認できなかったが、桁行3間分（柱間寸法5.1m等間）を検出した。梁間（柱間寸法4.5m等間）は2間であった。この北側柱列の北約3mのところ、雨落溝の残存部とみられる



第5図 平城京東三坊大路東側溝出土陶器（1～9 灰釉陶器，10・11越州窯陶器，12～19緑釉陶器）

礫敷(幅約1m)の一部を検出したが、南側では不明であった。この門の中心から南へ約20m離れた地点で、東西方向の溝1条(幅約5m・深さ約1m)を検出した。もとは玉石積だったらしく、一部に玉石が残存していた。この溝から南の地域については、諸般の事情により十分な精査を行えなかったので断言はさしひかえるが、特に顕著な遺構が存在する様相はみられなかった。

したがって、今回の調査で藤原宮の南限を確認したとはいえない。ただ門とその南の溝との位置関係が、宮城西限・北限の柱列と外側の溝とのそれに類似すること、溝以南に顕著な遺構が存在しなかったことなどを考えると、この門を宮城南面中央門とする岸俊男氏の説⁽⁶⁾に、かなりの蓋然性を認めることもできよう。

- 註 1 前方部南方・後円部西北方の2カ所で外堤の内縁にならべた埴輪列の存在を確認している。
- 2 本調査の後に実施した不退寺境内緊急調査(69年12月)で存在を確認した後円部の周濠の位置から本古墳の全長の値を推定した。
- 3 奈良教育大学梅田甲子郎氏によると、配石は黒雲母石英質片麻岩・粗粒両雲母花こう岩・石英質片麻岩から成っている。これらの岩類は、奈良付近一帯の基盤岩である領家式岩類に属する。
- 4 檜崎彰一「猿投山須恵器の編年」(『世界陶磁全集』第1巻, 1961.10)。
- 5 稲田孝司「左京三坊大路東側溝の施釉陶器」(奈良県観光 第163号, 1970.6)。
- 6 岸 俊男「京域の想定と藤原京条坊制」(『藤原宮』, 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第25冊, 1969.3)。

(松下正司・佐藤興治・猪熊兼勝)